史伝と文芸批評

[illegible]

河上徹太郎（かわかみ・てつたろう）一九〇二年、長崎市に生まれる。一高を経て、一九二六年、東京帝国大学経済学部卒業。学生時代に小林秀雄、中原中也、永井龍男らの同人雑誌「山繭」に評論を書き始め、一九二九年、中原中也、大岡昇平らと「白痴群」を創刊。一九三六年、「文學界」同人に参加、本格的な評論活動に入る。戦後、「私の詩と真実」で読売文学賞を、「日本のアウトサイダー」で新潮文学賞を、長年の評論活動に対して日本芸術院賞を、「吉田松陰」で野間文芸賞を、「有愁日記」で日本文学大賞をそれぞれ受賞。芸術院会員、文化功労者。他に「西欧暮色」「愁ひ顔のさむらひたち」「歴史の跫音」等の著書がある。

史伝と文芸批評

一九八〇年三月二〇日　第一刷印刷
一九八〇年三月二五日　第一刷発行

定価一五〇〇円

著者　河上徹太郎
発行者　寺田博
発行所　株式会社　作品社
東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒一〇二電話（〇三）二六二一九七五三
振替口座（東京）六一二七一八三

本文印刷　図書印刷
函・扉印刷　栗田印刷
製本所　小泉製本

（落・乱丁本お取替え致します）

© Tetsutaro Kawakami 1980　Printed in Japan

史伝と文芸批評　目次

I

史伝と文芸批評の間——ストレエチイの文学論　9
宮廷住ひのサンボリスト　23
「私のドストイエフスキー」　97

II

このごろの旅　115
交遊抄　119
座右の書　122
敗軍の将己れを語らず　124
前原一誠を書き終へて　130
私の好きな詩　131
私の文章修業　134

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「文學界」の思ひ出　140
牧野信一文学碑　146

Ⅲ

手塚君の初期散文　153
『天皇の世紀』について　157
泰淳さんの髯　161
椎名さんの魅力　166
『夕べの雲』の一家　170
宇野さんと岩国　175
私の中の日本人——福原麟太郎　179
その頃の大岡君　186
二老婦人の手記　191

ある祝辞――遠山一行『ショパン』受賞祝賀会席上にて　200
中島敦君の作品について　205
久米正雄と佐佐木茂索　211
久保田万太郎　215
川端さんの思ひ出　221
武者さんの思ひ出　225
思ひ出――石川桂郎　231
思ひ出――檀一雄　234
あとがき　239

装丁　菊地信義

史伝と文芸批評

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

史伝と文芸批評の間——ストレエチイの文学論

一昨年の春から昨年の夏まで断続して「新潮」に連載した郷土史による『歴史の跫音』が漸く終つた。私は『吉田松陰』の次に近代泰西の史伝を若干書いて来たが、今度の連載は前著『愁ひ顔のさむらひたち』（文藝春秋刊）に続いて防長中心の取材で、人物は前原一誠・大内義隆・瀬戸内の海賊たちと思ひついたままだが、それには岩国に大岡昇氏といふ名テューターがゐて、探訪や文献に周到な手引をして下さつた御蔭なのである。但しこの仕事は月に二三千頁も刷りの悪い旧刊書を読まねばならず、最近視力が急に衰へ、白内障の手術の宣告を受けたのもそのせゐがあるかも知れない。

私の史伝への興味は、かつても述べた覚えがあるが、一言でいへば史実はフィクションよりも想像性が豊かであるといふ私の逆説に尽きるのである。これは事実は小説よりも奇なりとい

ふ昔からのアフォリズムと先づ同じ原理なのだが、私の気持を私の言葉でいへば、小説家の想像力には限界があり、一定の型の中で働かねばならぬもので、その型を外すと作品として空疎なものになるのだから、その意味で却つて不自由なものであつて、むしろ史実の奔放な行動性の方が現実的・人間的で、想像（創造）の上で自由である、といふのである。

この感想は、小説と史伝の対照の一般論としては独断的であるかも知れぬが、私のやうに長年殊に雑誌小説を読む倦怠に悩まされて来た者には起り得る不満として許されると思ふ。或ひは近代小説一般の非現実性への不満だともいへよう。そして昨今の読書界の歴史ブームとも共通するものがある事情である。

そこから、これも私の個人的な傾向かも知れぬが、文芸評論をやつてゐると次第に歴史好みになつて来るといふ傾きが自分に見出されるのである。これはただ趣味の問題ではなく、私の文芸評論家としての自己批判なのである。それをかつて私は「硬文学論」などいふ生硬な表現を使つて述べ、幸ひある程度文壇でも理解して貰へたやうだつたが、このことをもう少し雑談的に書いて見よう。

先づこれは偶然のやうだが、見落せない事実がある。それは史実を扱つてゐるとその当の人物が殆ど例外なくだんだん好きになつて来ることである。これは大小説を読んでその主人公の

魅力に惚れるといふのとは一寸違つた経験である。それは前原一誠のやうな頭の悪い反逆児でも、大内義隆のやうな思ひ上つた田舎貴族でも、接してゐるうちに私の愛情はその人柄の前でほごれてゆくのである。これこそ史伝のみが備へた魅力である。それは生ま身の持つ拒み難い肉感性といふものだらうか？　とにかくこの場合、「あばたもゑくぼ」ではなく、あばたがゑくぼなのである。そして近頃氾濫する職業歴史小説家の仕事が、人物を次々に掠め去るだけで、そこまで陥こんだ愛情がないのは淋しいことである。

吉田松陰が佐久間象山に接してその識見に敬服した手紙を兄に書いてゐる中で、一節印象に残つた言葉があつた。それは先生は洋学の必要を説く傍ら経書も読めといつてゐるが、自分には経書よりも史書が大切だと思はれるといふのだ。そして自らも『史記』などを大いに読み、弟子たちにもそれを奨励してゐるのである。これは松陰の『史記』に限らず、当時の知的な武士階級には史書が文学であり、教養小説であつた。

『史記』といへば死んだ武田泰淳の若年の名著に『司馬遷』（後に『史記の世界』と改題）があり、その史的叙述に彼が如何に傾倒したかを語つてゐるものがあるが、後から考へれば彼の創作の骨格をなすものに『史記』の構想力が影響してゐるとすれば、それは大したことである。『史記』の人物は、私の一誠や義隆と違つて大人物であり、それが直截に力強く生きた運命を、

いはばシーザーの「来た、見た、勝つた」風に描いた雄勁な文章は、古今の大文学である。中島敦も史書の古典の文脈をなぞつて名作を遺してゐる。似た例はシェクスピアである。彼の傑作の数々はプルタークの模倣、或ひはその剽竊といつても彼の不名誉にはならない。

それはとにかく、私が今まで史伝に接して異常な感銘を受けたのはリットン・ストレエチイであつた。その『フローレンス・ナイティンゲール』の翻訳が半世紀近くも前に小冊子で出たのを読んで、史伝の真髄に触れた思ひがしたのである。そこでは彼女はクリミヤの「白衣の天使」であるより、誇りの高いヴィクトリヤ朝の貴婦人であり、己が使命の下での政治慾の権化である。帰国後大臣や将軍を見降して傲然たる彼女は、名誉心や権勢慾ではなく、「魔に憑かれたやうな」(ストレエチイ)道義心からであつた。彼女は一種のマクベス夫人であらうか？

とにかくストレエチイが人物を描くと自づとそこに時代が漂つてゐる。彼の文学と歴史の融合には、その味はひにユニークなものがある。

『ナイティンゲール』が"Eminent Victorians"といふ評伝集にあると知り、後にこの本を手に入れて読んだ。『ゴードン将軍』などがこの中にあり、この名将の勇敢で道義感に支配された運命が、十九世紀大英帝国の国運の命ずるままに、南京で太平天国の乱を平げ、エヂプトで土民兵に囲まれて戦死する次第がクッキリと描かれてゐた。

そのうち片岡鉄兵氏がストレエチイの代表作『エリザベスとエセックス』を訳出したりして、その名も一応わが国に拡まつた。しかし他に特に関心を引く作品がないままに、彼は私の記憶から遠ざかつていつた。

ところが近頃私が史伝を書くやうになつて、何となくストレエチイのスタイルが私の思ひ出の中に蘇つて来た。もし私の方法にお手本があるとすれば、それはストレエチイではないだらうかと思つたりした。他に心当りがないままに。そしてその人間の運命と風格を一つに纏め上げたスタイルの魅力が、私に個人的に親しいものに思はれた。

そんなことで、今度連載の取材から解放されて暇が出来ると、久し振りにまたストレエチイ著作集を取り出し、今度はその文学論から読み出した。以前は彼の社会的有名人を扱つた伝記だけを読めばいいのだと思つて、文学論集は措いてゐたのだつた。

ところがそれは間違ひであつた。彼は文芸評論家としても勝れた一流の見識を持つてゐる。しかもその取上げた作家の人間的な扱ひ方が極めて「ストレエチイ的」なのである。つまり彼が文学者を分析する方法の中に、彼が社会的な行動家の情熱を追求する手口がそのまま現れてゐるといへる。その結果、史伝とは文学であるといふ私の原理がそこに実現されてゐるのである。

彼の文学論は二つ、"Literary Essays" と "Landmarks in French Literature" である。今まともにストレエチイ論を書く気はないが、この二著の読後感をとりとめもなく書き連ねて見よう。

彼が取上げてゐる作家論の中で一番力の籠つたものは、ラシーヌとシェクスピアであらうか？　そして彼の文学論の卓越した所以は、今いつたやうにそれによつて時代が書けてゐることである。ラシーヌを書くことによつてルイ十四世が描かれ、シェクスピアによつてイギリスの興隆と民族性の荒々しさが語られてゐるといへよう。

シェクスピアといへば、彼の『文芸評論』の中に僅か四頁の『言葉と詩』といふ短文がある。その書出しはドガとマラルメとの有名な対話、詩作の好きなドガが「私にはアイディアはいくらでも浮ぶが詩が書けない」といふと、マラルメが「詩はアイディアで書くものではなくて言葉で書くものだよ、」といふ逸話で始まつてゐる。そして最後に「彼（シェクスピア）は詩人として始まり、詩人として終つた。人間、人生、運命、現実――さういつたものに彼はいつまでも関はつてゐなかつた。それらは虚構である――単なるアイディアである。詩はアイディアでは書かれない。それは言葉で書かれる」といつてゐるのは、彼のシェクスピアへの愛着と理解とを一言でいひ現してゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com